



**PACIFIC
PEDAL
LIFE
DESIGN**



現在、世界では金融不況、地球温暖化、人口爆発、食料危機などが起き、それに伴い経済の潮目も変わったと言われています。これらは産業革命以降、経済を拡大し消費することが発展の原動力とされるなか、エネルギーを無限に使ってきたことに対する当然の帰結です。消費エネルギーを抑え、文化のエネルギーと創造の力で世界を変え、人々の生活を考える、本当の人類の英知が必要な時期が来たといえます。TOKYO DESIGN FLOWはこのような問題意識のもと、都市の状況や人々のライフスタイルそのものをデザインの対象としてとらえ、それら全てのデザインを覆う傘となり、大きな流れを創り出す運動体となることを目指します。TOKYO DESIGN FLOWは一つの事象を表すものではありません。東京を中心にデザインを取り巻く状況を、マンスリーイベント「LAST THURSDAY」をはじめとするリアルイベント、ウェブサイト、紙媒体などを通し情報を発信していきます。

Design & philosophy

Chari and our life

チャリと僕らの事情

何時のときからか、バイクがかっこ良く思えなくなった。外国製スポーツカーには成金か不動産屋か金融業の人の乗り物のように思えて全く興味がわかなくなった。文明は進化し、GNPは増大し、企業は投資家に対する責任を全うすべく増殖し巨大化する。進化論を唱えたチャールズ・ダーウインは世界中の生物を観察して生物は進化することに気がついた。社会や文明やデザインも進化するのだろうか？ 一方ダーウインは40年かけたライフワークでミミズを研究している。有機農法の基礎に成る土壌を作るのは過去も現在もミミズだ。長い間かけてダーウインはミミズは地中深くは行かないことを見つけた。ミミズは進化しないのか？ 文明の進化と、文化(culture-cultivate)の深化。有機農法とミミズ。文明の進化としてのコンピューターと情報の進歩。自転車乗りに優しい都市の統計とクリエイティブシティとは不思議に重なる。許容度や柔軟性、多様な情報を取り入れてそれを創造性に変えて行く力こそが大切に成ってきた。自転車に乗ってキャンパスを廻る大学生活からコンピュータは生まれ発展した。コンピュータは知的な自転車だ、とステイブ・ジョブズは初めてのマックの広告でも言った。自転車は自分の足で車を転がすもの、自分の意志と筋肉で動くもの。そしてコンピューターは自分の創造性を最大限に助けるもの。自己の自由を最も解放するもの。才能とインスピレーションを助けてまわすもの。それは自転車と一緒に転がる。自転車に乗って走っていると喉が渇く。コンピューターの前に長くいると食欲がわかない。未来の自転車生活は、健康な知識欲と創造性が社会とかみ合って、文化の深化と共にあるのではないか。そう考えると内燃機関でガソリンを燃焼させるエネルギーのスポーツカーに興味なくなったのもまんざら偶然ではないのではないかと思えてくる。体内エネルギーと知的エネルギーが燃焼する自転車生活は僕らの身の丈にあった未来なのか？

久しぶり！ MAT. です。どうどう？ 元気してた？ 僕？ 僕は相変わらず元気にやっているよー。超元気。最近自転車なんて乗ったりしてさ。自転車の移動の速度が普段ではないスピードだから、新鮮なんだ。それで、自転車に乗ってるときに考えていたんだけど、今地球ちょっとやべえ、みたいな空気になってるじゃない？ 環境問題も、人口問題も。特に若い人たちって何となく直感でそれを感じているように思うのね。本能ってやつ？ たとえば、農業やったり、DIYにはまったり、自転車買って乗ったり。何かあったときに、自分で何とか出来る範囲の何か、ということに目が向いているような気がするんだ。ほんと。それは、シンプルで力強く、美しいあ、と思うのよ。そこに、理想とする未来生活のヒントはあるんじゃないかな、なんて思ったり。……え？ 何が一番美しいって？ それは、君に決まってるじゃないの！！ (キラーン)



MAT.



東京ミッドタウン・デザインハブ 第23回企画展

PACIFIC PEDAL LIFE DESIGN

アジア-パシフィックの自転車生活デザイン展

2010.7.29 thu. - 8.27 fri. 11:00-19:00

TOKYO MIDTOWN DESIGNHUB [Midtown Tower 5F] Admission Free

東京ミッドタウン・デザインハブ [ミッドタウン・タワー5階] 無休・入場無料
東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー 5FTokyo Midtown
DESIGN
HUB

アジアの都市生活の未来は、 自転車とともに、 快適に楽しく生活することにある。

クリーンでエコロジカルな移動手段として、ファッションやカルチャーとして、またインダストリーとして、いま改めて注目されるのが自転車です。

急速な経済成長をとげつつあるアジア諸国、とりわけ中国では、3.2人に1台、じつに4億台以上の自転車が、移動、運搬、販売など、生活のさまざまなシーンに重要な役割を果たしています。

一方、クルマ社会が成熟した欧米では、メッセンジャーなどの仕事をはじめ、マウンテンバイクやBMX、知的に、オシャレに自転車を楽しむ生活など、新しいカルチャーが次々と発信されています。

本展ではこうした自転車を、「働く」「考える」「食べる」「走る」「遊ぶ」の5つの動詞から考え、実車と映像を交えて紹介します。

約8000万台のクルマを保有する、自動車大国日本。

しかし同時に1.5人に1台、約8600万台の自転車(うち80万台が電動アシスト自転車)をもつ日本は、世界屈指の自転車大国でもあります。今アジアで活躍するRIKISYA(リキシャ)は、

日本が初めてつくったモノを運ぶ自転車が伝播し、名前を留めているものであり、パーツの生産では、日本のシマノが約80パーセント、世界一のシェアを誇っています。

メッセンジャーが疾走する傍らで豆腐屋のラッパが鳴り響き、

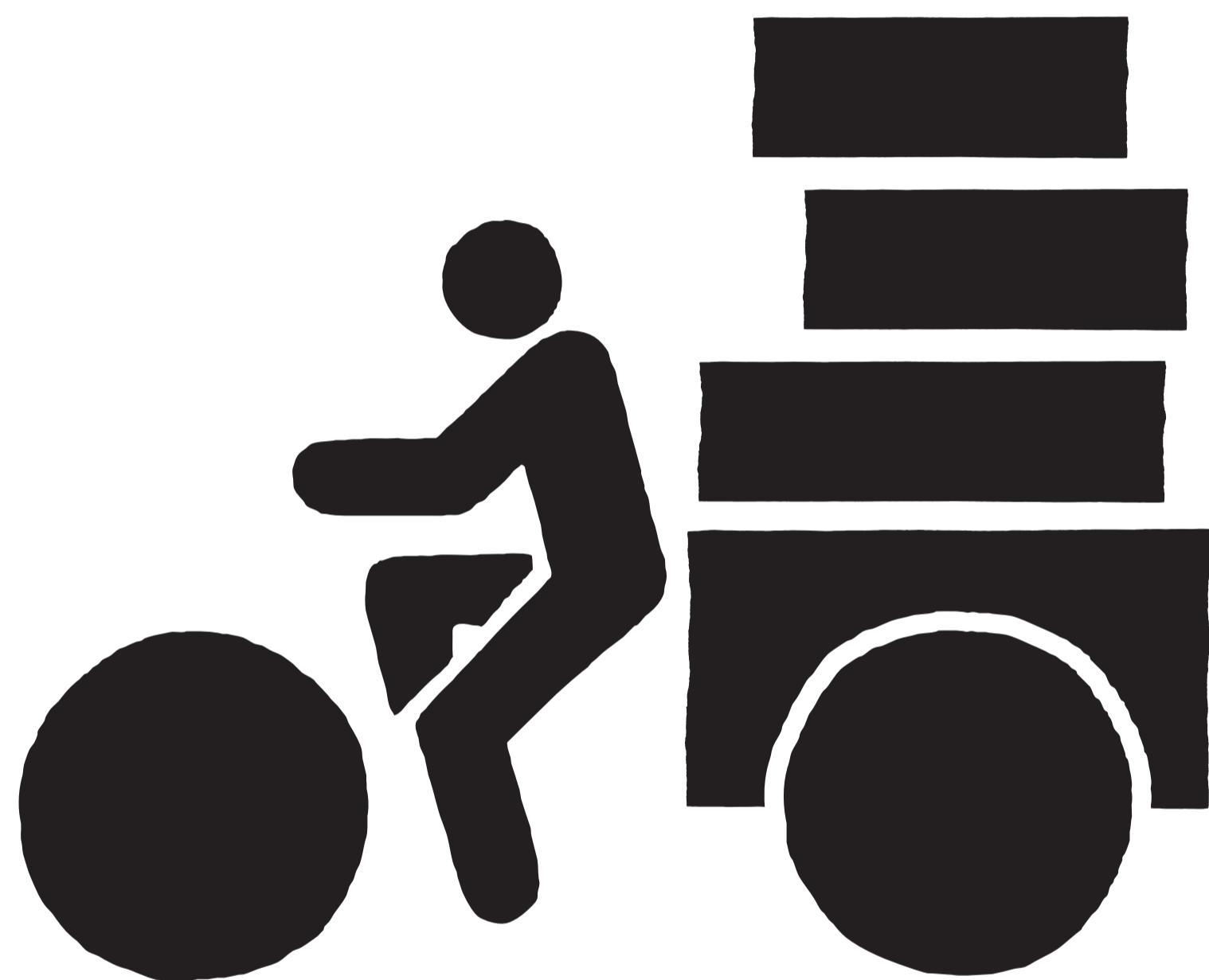
欧米型の自転車とアジア型の自転車が混在する、独自の自転車文化を形成する国際都市・東京。

東京だからこそ、ひろがり、つながる、未来の都市と自転車と生活のデザインの可能性。

サステナブルな世界をめざして、自転車とともにある理想の都市生活を提示します。



RIDE AND WORK

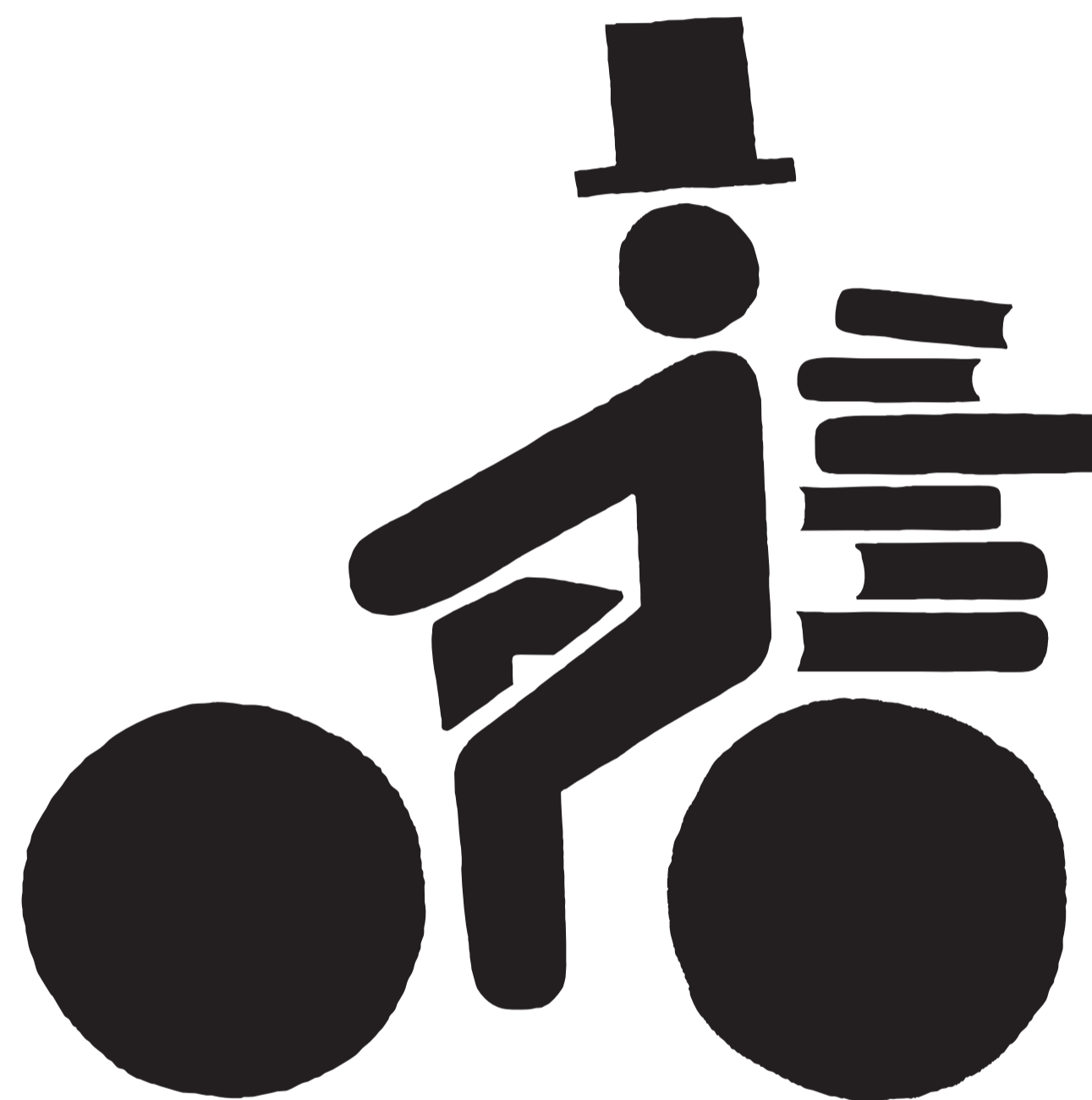


働く自転車

びっくりするほど荷物を積んだ自転車、物売りの屋台、人力タクシーのリキシャ…。アジアでは、働く道具として、自転車が生き生きと活躍しています。一方、バイクや自動車普及し、モータリゼーションが成熟した欧米の都市では、ペロタクシーやクリスマスチャリアバイク、メッセンジャーバイクなど、便利さだけでなく、地球にやさしい道具として、自転車が見直されはじめています。日本ではどうでしょうか？

日本にも、かつては店の軒先には必ずご自慢の自転車があり、日々の配達やご用聞きにと、活躍していたものでした。それもいつしかバイクや自動車に取って代わられたようにも見えますが、これまでとはちょっと違う働き方に、自転車は復活の兆しを見せています。何かの代わりとしてではなく、自転車だからこそ生まれる新しい働き方がある。人としてのほんとうに豊かな生活を探りながら、「働く自転車」を紹介します。

RIDE AND THINK



考える自転車

自転車で公園を走ると、季節ごとの風を、体全体で感じることができます。街を走れば、私たちが日々を暮らす、都市の姿が見えてきます。裏通りには人びとの生活があり、たくさんの私小説にあふれています。自転車を転がしながら考える。自然のこと、都市のこと、時代のこと、生活のこと。考えることを生活の中心に置く人には、自転車の速度はうってつけです。歩くよりも少し速く、バイクや自動車よりはかなりゆったりと、自転車だからこそ見えてくる風景に、思索の糸を垂れてみましょう。体力に自信のないという方には、電動アシスト自転車がおススメです。バッグには、本や文具やスケッチブック、コンピュータを詰め込んで。現代の「ディオゲネスの樽」、知的な乗り物としての自転車。そんなシーンを集め、街の思索者の「考える自転車」生活を提案します。

RIDE AND EAT



食べる自転車

人の集まるところに、食もまた集まります。
 自動車による物流システムもなく、スーパーもコンビニもなかった時代、新鮮な魚介類や野菜、できたての豆腐、冷たいアイスクャンディーなどの行商が、自転車に乗って、町から町へ、ひとの集まりの中を行き交っていました。とった人やつくった人が、自分の足で、食べる人に直接届ける。そんな心にやさしい食と自転車との関係が、まだアジアには多く残っています。人が食べるものだから、人とのつながりの中でつくって売る。買う人の顔が見えるから、その反応を商品づくりに生かすことができる。そんなあたりまえのやり方が、今、日本の若い店主にも見直されはじめています。大きな店は無理でも、自転車なら、最初のお店としても無理がありません。自転車の動力はもちろん人のカラダ。そのカラダをつくる毎日の食事。走ると食べるを永久機関のように繰り返す、「食べる自転車」を集めます。

RIDE AND DASH



走る自転車

より速く、より美しく、より強く——それは人があらゆる乗り物に求める夢です。自転車もつ機能美にも、絶え間ない向上心や探求心が映し出されています。ペダルが重く感じられるのは、タイヤと地面の摩擦、そして空気抵抗があるからです。細いタイヤ、流線型のダイナミックなデザイン、より強靱なフレーム素材など、物理的抵抗を軽減するために、自転車はそのすべてのパーツを進化させてきました。乗り手自身も身体を鍛練し、トレーニングを重ね、機能を最大限に引き出します。その文字通り人馬一体となった、人と自転車の最大の挑戦がレースです。ツール・ド・フランスで有名なロードレースをはじめ、競輪などのトラックレース、クロスカントリー、シクロクロスなど、世界ではさまざまな自転車レースが盛んに行なわれています。モーターを使わない、人力による地上最速の乗り物としての自転車。単純なようでいてかなり深い「走る自転車」の、進化し続ける姿をご覧ください。

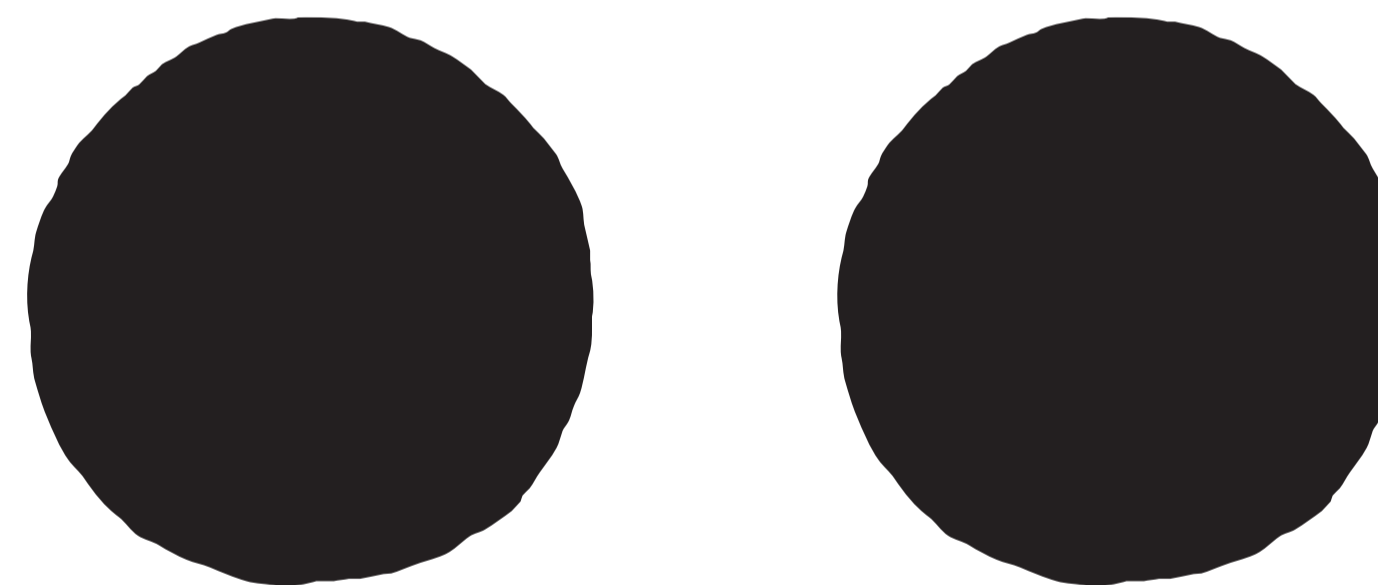
RIDE AND FUN



遊ぶ自転車

初めて補助輪をはずした瞬間、なんともいえない喜びを感じませんでしたか？
ウィリーやドリフト、障害越え、ちょっと危険なことにも挑戦し、
ドキドキ、ワクワクを楽しんだ経験はありませんか？
自転車に乗る、それだけでももちろん楽しいけれど、
よりダイナミックに、よりスピーディーに乗ることができれば、もっと楽しい。
自転車は移動するための道具。そんな窮屈な考えを捨ててしまえば、
自転車を楽しむ方法は、もっとたくさん見えてくるはず。
マウンテンバイク、バイクボロ、サイクルサッカー、トリックなど、
自転車を使った遊びや競技も、今では多種多様に楽しられています。
本気で遊ぶ、そのために進化した、自転車とその乗り手たちを紹介します。
見ているだけでも楽しくなる、挑戦してみればより生活が面白くなる。
とことん自由でハッピーな、「遊ぶ自転車」の世界です。

RIDE AND CREATE



未来のペダルライフ

ダイヤモンドフレームにチェーン駆動を組み合わせた、
現在とほとんど変わらない自転車の基本形が確立したのが19世紀後半のこと。
以後100年以上の間、その形を大きく変えることなく生活のなかで生き続けてきました。
機械の原型とも、限りなく完成に近いデザインともいわれるゆえんです。
しかし自転車の進化は、決して止まっているわけではありません。
人のカラダの形と動きに厳しく規定され、軽量でなくてはならない自転車の開発は、
針の穴を通すような非常にシビアな技術とアイデアの積み重ねであり、
今も世界中のエンジニアやデザイナー、発明家が挑戦し続けています。
この日本でも新しい視点と技術を背景に、自転車の革新にチャレンジしている人たちがいます。
彼らが創りだすのは自転車の新しいあり方、価値、そして乗り手の未来です。
「未来のペダルライフ」、その萌芽をご覧ください。

データで見る 世界のPEDAL LIFE

ヨーロッパでは都市の交通インフラとして、またクリエイティブな乗り物として人々は自転車を選んで乗り、中国では環境対策と合理性の末に未知の電動自転車社会が生まれつつあります。日本の自転車生活はこれからどのように変わるのか？ 変わるべきなのか？ 世界のデータを見ながら考えてみよう。

text & data: 清田直博 (Media Surf Communications / Night Pedal Cruising)

世界のバイクフレンドリーシティ

順位	都市名	人口	クリエイティブ度			自転車環境				
			Technology	Talent	Tolerance	自転車交通割合	自転車レーン	公共自転車システム	ベロタクシー	その他
1	アムステルダム (オランダ)	750,000	○	○	◎	40%	N/A	○	○	自転車が都市の交通インフラの重要な一部になっている。自転車ラックや公共レンタサイクルも充実。自転車の歴史が長い街。
2	ポートランド (アメリカ)	533,492	◎	○	◎	9%	418km	—	—	シアトルのクリエイティブ都市。オンロード、オフロードともに自転車レーンが充実。コミュニティサイクルセンターによる自転車教育や啓蒙も盛ん。
3	コペンハーゲン (デンマーク)	1,800,000	◎	○	◎	50%	N/A	○	○	無料のレンタル自転車サービスがあり、自動車と隔離された自転車専用レーンなど、自転車交通の割合も高い。
4	ボルダー (アメリカ)	101,500	○	◎	◎	70%	(金道路の) 95%	—	—	自転車交通安全のバリアックプログラムが自転車利用促進を促し、交通予算の15%を自転車環境の整備に費やしている。
5	デービス (アメリカ)	65,000	○	◎	◎	17%	160km	—	—	カリフォルニア大学デービス校がある西海岸の都市。毎年五月に「Cyclebration」という自転車祭りが月に渡り開催される。無料の自転車地蔵も充実。
6	サンネス (ノルウェー)	56,000	○	○	○	N/A	N/A	○	—	1996年にノルウェーで最初に公共自転車システムを導入。交通インフラの核になっている。
7	トロンヘイム (ノルウェー)	161,730	○	◎	◎	18%	N/A	○	—	環境に優しい都市を目指し、自転車の利用を奨励している。バイクリフトが街中に整備され、自転車が観光客の最大の楽しみになっている。
8	サンフランシスコ (アメリカ)	744,041	◎	◎	◎	5.4%	330km	—	—	全ての公共交通機関で自転車の乗り入れが可能で自転車レーンも充実。自転車団体から送り出された市議会議員も。
9	ベルリン (ドイツ)	3,400,000	◎	◎	◎	15%	130km	△ (鉄道会社が運営)	○	EUで2番目に人口の多い都市ながら、市民の自動車の所有率は50%以下。最近10年間で自転車利用が倍増し、一日約40万人が自転車で街を走る。
10	バルセロナ (スペイン)	1,605,602	◎	◎	◎	N/A	N/A	○	○	「Bicing」という公共自転車システムを2007年に導入し、市内100カ所のスポットで乗り降りが可能。9月には「Car Free Day」があり、市民は自転車で移動する。
11	バーゼル (スイス)	200,000	○	◎	◎	25%	N/A	○	—	都市には視認性の高い自転車専用レーンが整備され、郊外には地下のレンタルバイクスタンドがあり、スイスの他の地域と自転車道で結ばれている。

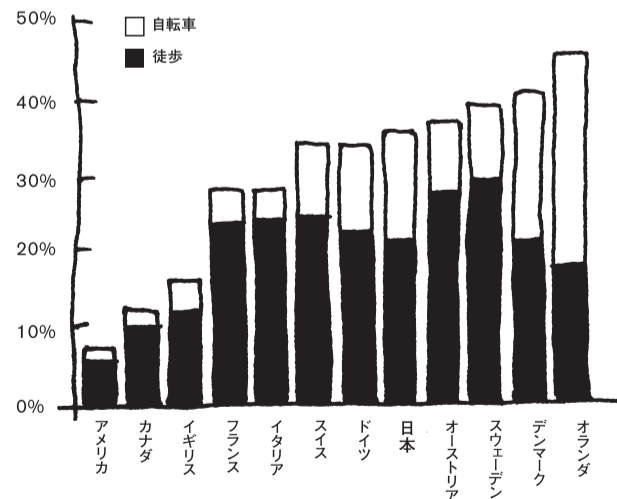
※ N/A: データ無し

クリエイティブな都市は自転車にも優しい

クリエイティブ性の高い都市には、ITなどの先端技術の集積度「Technology (技術)」、才能ある人々を集め生み出す環境「Talent (才能)」、異なる民族や同性愛者を受け入れる開放性「Tolerance (寛容性)」が重要だと言われている。アムステルダム、コペンハーゲン、ベルリン、バルセロナなどはヨーロッパ有数のクリエイティブ都市であり、アメリカのポートランドやサンフランシスコもクリエイティブ産業が集積する開放的な都市。世界のバイクフレンドリーシティにはクリエイティブ度の高い都市が多く、クリエイティブな人は自転車が好き、自転車に乗る人はクリエイティブな環境に集まると言えそうだ。

出典: 「Virgin Vacations」http://www.virgin-vacations.com 参考: リチャードフロリダ「クリエイティブ資本論」

主要都市の交通分担率

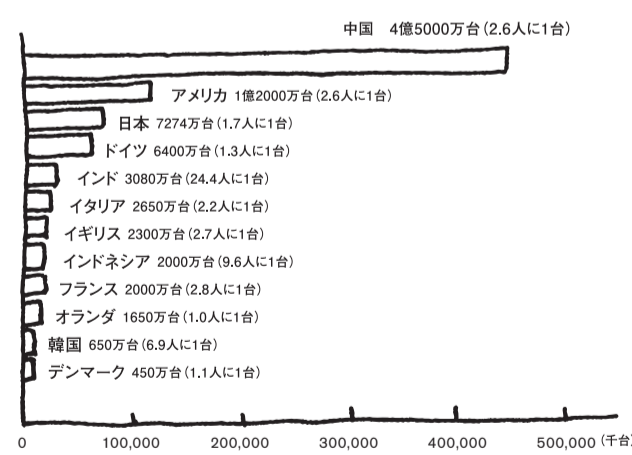


自転車にはインフラが重要

交通手段全体のなかの自転車と徒歩の割合。ヨーロッパの自転車先進国ではインフラも整備され自転車の割合が高い。日本も15%と高いが、自宅から駅までの利用が多く、駅前の乱雑な駐輪状況を考えてあまり喜べないのかも。

出典: 国土交通省「都市交通における自転車利用のあり方に関する研究」

世界の自転車保有台数ランキング

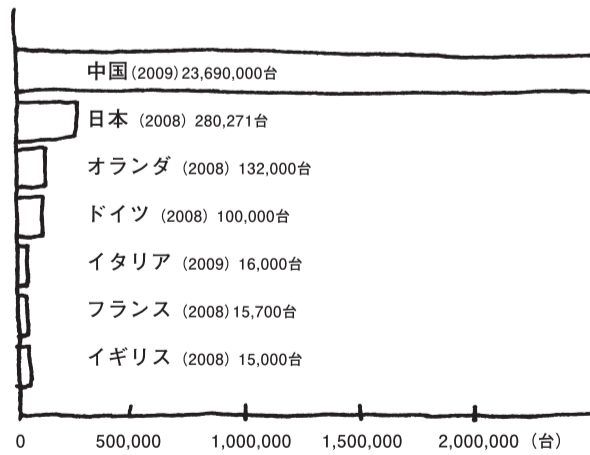


保有台数は中国、保有率はヨーロッパが高い

生産台数と人口の多さから保有台数は中国がトップだが、自転車の保有率(括弧内)はオランダやデンマークなどの自転車先進国が高い。日本は保有台数、保有率ともに高い。

*自転車産業振興会「自転車統計要覧」のデータを元に作成

世界の電動自転車販売台数ランキング

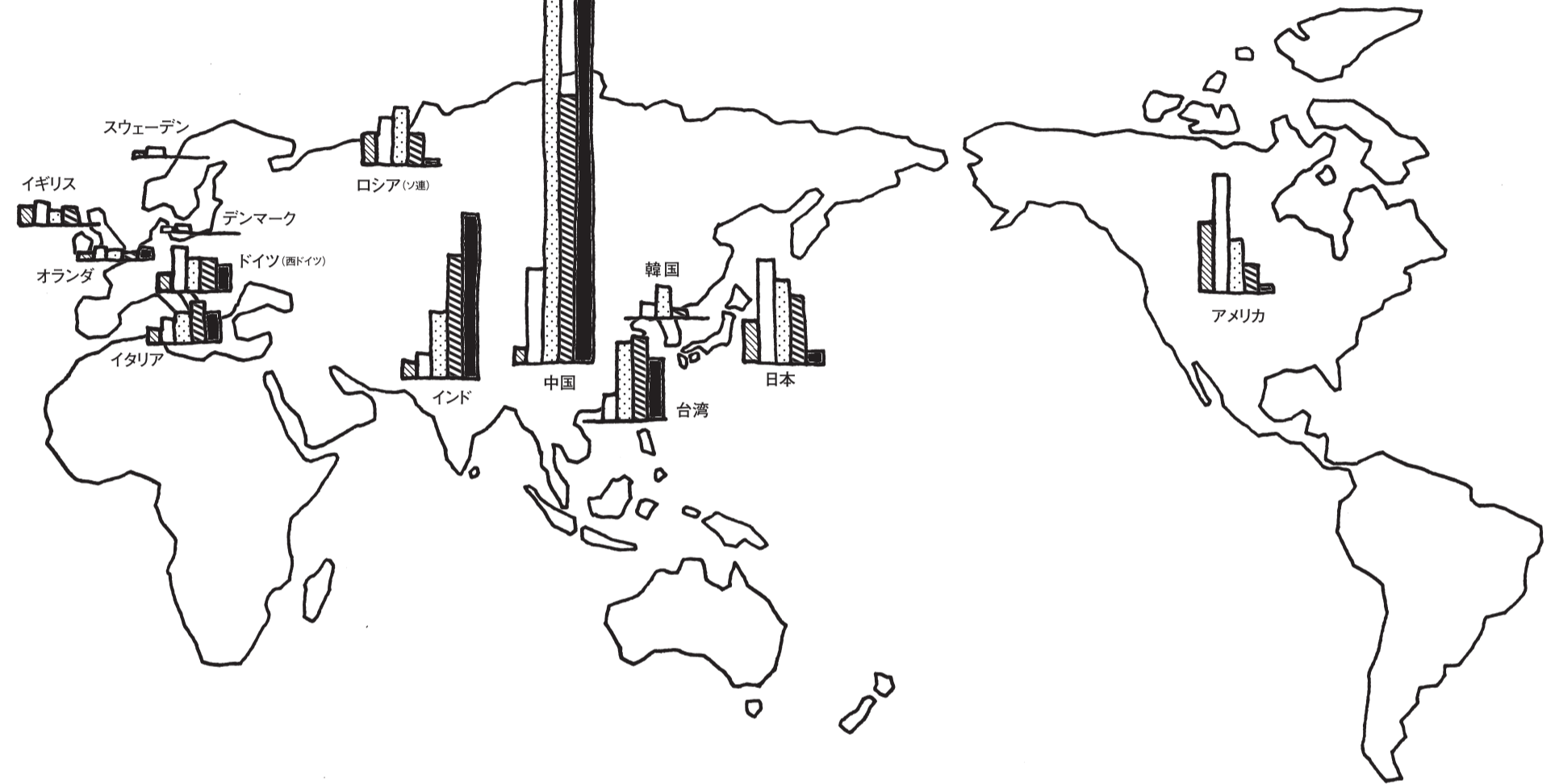
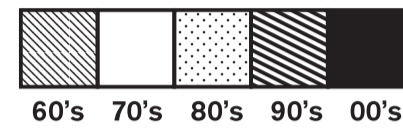


中国が電動自転車の最大の市場に

中国では環境問題や交通事故の問題解決のため、政策として電動自転車の普及を進めており、その結果世界最大の電動自転車大国に。自動車の約4倍の電動自転車が中国では販売され、庶民の新しい足となった。

*自転車産業振興会の海外レポートを元に作成

年代別主要各国自転車生産台数



アジアが世界の自転車工場に

1960年代から2000年代まで、世界の自転車生産国の移り変わりを見ても。1960年代はアメリカを先頭に欧米諸国で半分以上の生産を担っていたが、1970年代以降は日本と中国が台頭し、現代では中国が突出。中国の生産台数の6割以上が日本や欧米へ輸出されている。台湾も生産のほとんどが輸出で、イタリアブランドのカーボンフレームなど高級車の生産も多いのが特徴。

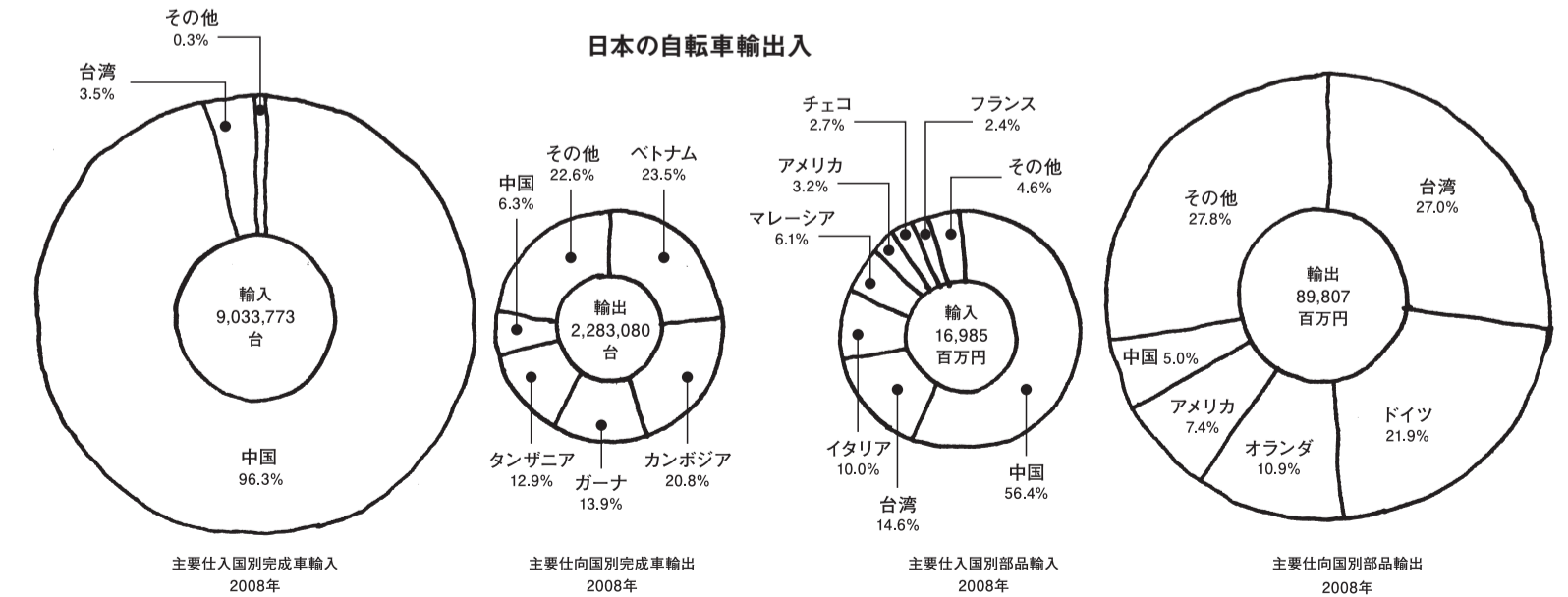
*自転車産業振興会「自転車統計要覧」のデータを元に作成

中国が日本の自転車工場に

2008年の国内生産は約100万台だが、輸入台数はその約9倍でほとんどが中国から輸入されている。この事は、日本で走っているほとんどの自転車が中国製だということ。輸出は約200万台で、生産台数の2倍の自転車を輸出している。ということは、輸出のほとんどが中古車だということ。アフリカの国々へ輸出されている。

部品の輸出額は完成車輸出額の約30倍。日本製のパーツが世界の自転車を支えている。

*自転車産業振興会「自転車統計要覧」のデータを元に作成



Wheels for the future.

都市での自転車利用は、環境や健康などさまざまな要因により、増加している。しかし、これまでの自動車社会との齟齬により、交通事情や意識の問題が顕著になってきている。自転車がある生活、社会のこれから、そして自転車を通して見る未来を聞くためにテクノロジーライターにして、自転車にも造詣が深く、自転車雑誌にも多く寄稿する大谷和利さんにお話を聞いた。

interview & text: 編集部

大谷さんは自転車のどんなところに魅かれているのでしょうか。

以前、アップル社の創立者の一人で、現CEOのステーブ・ジョブズは、Macintoshを「知的自転車 (Wheels for the Mind)」と呼んだんです。自転車は、自動車と違って自分で漕ぐものです。つまりインプットを与えないかぎり前には進みません。もちろん自動車にもアクセルを踏むという行為は必要ですが、それはスイッチのようなものですね。これに対して自転車は、自分で漕ぐことというインプット、つまり自分の身体能力を何倍にも増幅してくれるんです。徒歩であれば、一時間に20キロも先に行くことはできませんが、それは自転車に乗ることで簡単に成し遂げられてしまう。さらには一日に100キロ、200キロの距離も自分の体力次第で走行することができます。そう考えるとコンピュータも、それ自身が何かを考えてくれるわけではなく、あくまでも自分で考えたことやまとめようとしている情報をアシストして、きちんと整理することができたり、組み合わせを検証して新しい発見をしたりすることができます。身体能力の増幅器が自転車だとすれば、知的能力の増幅器がコンピュータというわけですね。そういうところで、テクノロジーライターとしての僕の専門分野と、自転車のあり方というのは、すごく似ているところがあって、僕が両方好きなのは、知力と体力、そのバランスなのかもしれません。

移動の際には、いつも折りたたみ自転車を持って動かれているとお聞きしました。そのなかで都市の交通状況については、どう感じていますか？

自転車は、その日の気分や行動の目的に応じて使い分けるのですが、都市部では、やはり、走りづらさ、駐めづらさを感じることはありますね。それを解消するには、荷物を運ぶトラックや人を運ぶバスなど大量輸送に関しては、電気自動車化して残すとしても、一般の乗用車は都心部に入れないようにしたり、もしくはロンドンのように渋滞税を取って、それが交通状況を整備するための資金となるようにするために良いと思います。そうすれば、どうしても必要な人は、渋滞税を払ってでも自動車を使うと思いますが、そうじゃない不要不急の人は渋滞税を払うなら、と別の手段を考えますよね。渋滞税の使い道としては、例えば、自転車スタンドを充実させたり、電動アシストの充電スタンド、場合によっては公共交通機関の運賃を下げることもできるかもしれません。街中を走っている自動車を見ていても、やはり1人とか2人で乗っている場合が多いんです。僕自身も、昔は自動車が好きだったんですけど、そういう光景を見ると効率の悪い乗り物だな、と思うようになりました。定員いっぱいならば、それなの意味もあるとは思いますが。ヨーロッパの歴史ある都市の中心部は、もう軒並み車を排除しています。歩行者と路面電車と自転車、場合によってセグウェイのようなムーターが許可されています。車はどうするのかという、周辺部まで来て駐車し、そこから自転車や電動コミューター、公共交通機関に乗り換えて都心部に行く、そういった組み合わせです。日本で言うと、東京ではすぐには難しいかもしれませんが、京都や大阪、横浜、あるいは日本の自転車産業の中心である堺市などから取り組み始めて欲しいですね。最初は、自動車を乗り回していた人たちは不便に感じるかもしれませんが、長期的に見れば、渋滞もなくなるし、自分も意識せずに健康になっていきます。それに経済的なメリットもあって、保険料や税金もかかりませんし、ちょっとした自動車を一台買っただけで、自転車も何台も所有できるわけです。スペース的にも、自動車一台の場所に複数の自転車を置くことができますし、目的や気分に応じて、車種を変えて乗ったり、すごく豊かな移動生活ができるんじゃないかと思います。自分自身実感しているところがあるので、これからの社会で自転車はそういうふうになっていくことができるんじゃないかと。自動車メーカーも自転車や電動コミューターに目を向けざるを得ない状況になっていますし、自動車の売上が下がらなかな、ビジネス的な観点からも複数の交通手段をうまく組み合わせる方法を見つけてかないといけないんだと思います。

これから、未来に向かい、自転車が重要な役割を果たしていくなかで、自転車は体力の増幅以上の何かをもたらしてくれるのではないかと思います。

たぶん自転車は受け身じゃないというか、最初の話と少し重複しますが、自動車も運転手は必要ですが、かなり受け身乗り物だと思うんです。まったく自分の力ではないのに、エンジン吹かして突っ走っているドライバーを良く見かけますよね。まだカーブとかかかったら、テクニックが必要かもしれないけど、直線で、ともかく踏み込んでいる車を見ると、ある意味ですごく開けに思えるわけです。自転車だと、どんなにいいモデルを買っても、突っ走るためには自分かしっかりしないとダメじゃないですか。下手をすると坂道で別の自転車、もしかするとママチャリに抜かれたりもします。自転車が良いだけではダメなんです。自転車的な思考というのも、自分から少し能動的に動くことなんです。ゼロのインプットでは、増幅してもゼロ。何を掛けても、いつまでたってもゼロです。だから1でも2でもいいからインプットすることで、初めてそれが何倍かになっていく。行動や発想においても、それは同じです。何にも考えないで、ダラダラしているだけでは、自転車やコンピュータが目の前にあっても、何かが生まれることは絶対にありません。自分から能動的に乗ってみることで、発想が広がったり、考え方が柔軟になったり、あるいは健康にもなるわけです。自分から動くという意味。それを、自転車が後押ししてくれると思うし、天気良か良かったら、今日は遠出してみようかなとか、前向きに誘ってくれるものもありますね。発想にしても思考にしても、自分から動くことの大切さを自転車が触媒となって加速してくれるように感じます。多くの人がそうならば、自転車を通して未来社会が見えてくるのではないかと思います。



Kazutoshi Otani
テクノロジーライター、原宿 AssistOnアドバイザー、自称路上写真家。デザイン、電子機器、自転車、写真分野などの執筆活動のほか、商品企画のコンサルティングを行う。近著に「iPodをつかった男」「ステーブ・ジョブズの現場介入型ビジネス」、「iPhoneをつかった会社 ケータ業界を揺るがすアップル社の企業文化」、「43のキーワードで読み解くジョブズ没後事術:意外とマネできる!ビジネス極意」(以上、アスキー新書)「Macintosh名機図鑑」(えい出版社)「iPhoneカメラライフ」(BNN 新書)「iPhoneカメラ200%活用術」(えい出版社)



Mitsui Masashi
旅写真家。1974年生まれ。東京都在住。機械メーカーで働いた後、2000年12月から10ヶ月に渡ってユーラシア大陸一周の旅に出る。帰国後ホームページ「たびそら」を立ち上げ、大きな反響を得る。以降、アジアを中心に旅を続けながら、人々のありのままの表情を写真に撮り続ける。出版した著作は6冊。旅した国は37ヶ国。8月26日(木)から9月1日(木)まで アイテムフォトギャラリー「シリウス」にて写真展が開催。詳細はHP。「たびそら」http://www.tabisora.com/「リキシャで日本縦断！」http://bifte.eoblog.jp/twitter http://twitter.com/tabisora?



リキシャ

Bangladeshの「働く自転車」で、日本の「はたらきもの」に出会う旅

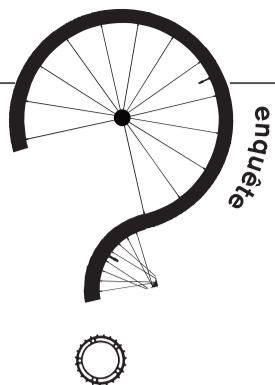
text & photo: 三井 昌志

みなさんは「リキシャ」という乗り物をご存じだろうか？アジアを旅したことがある方なら、あるいはこの名前に聞き覚えがあるかもしれない。「リキシャ」とはインドや Bangladesh を走っている三輪自転車タクシーのこと。車夫がペダルを漕ぎ、とても安い料金で短い距離を移動する「庶民の足」だ。ちなみにリキシャという呼称は日本の「人力車」に由来するのだとか。僕はいま、このリキシャに乗って日本を縦断する旅を行っている。沖縄から北海道まで。人力での超スローな旅だ。重量100キロもあるリキシャを漕いでアップダウンの激しい日本の田舎道を旅するのは、ほとんど酔狂と言ってもいい行為だ。とても疲れる。じゃあどうしてそんなことをしているのかとよく聞かれるのだが、その答えは自分にもよくわからない。「リキシャで日本を旅したら面白そうだな」あるときふと頭をよぎった気まぐれな思いつきを、そのまま実行してしまったのである。

僕は2001年からずっとアジアを旅しながら写真を撮ってきた。子供たちの笑顔や、働く人々や、災害や内戦の傷跡の中でも力強く生きる人々にカメラを向けてきた。そのなかでも Bangladesh はもともと印象深い国のひとつだった。アジアでもっとも貧しく、たびたび自然災害に襲われる国だが、そこに生きる人々とはとても人なつづくで陽気だった。リキシャはこの Bangladesh を代表する乗り物だ。自家用車やトラックがまだまだ高嶺の花である Bangladesh では、リキシャが人やモノを運搬する主役として使われている。リキシャの特徴はとにかく派手なこと。カラフルなペイントや意味不明の装飾に彩られたリキシャは、小さな工房で手作りされている。新車は1万5000タカ(2万円)ほど。品質には大いに問題があるが、修理しながら使えば15年は乗れるという。僕はまず首都ダッカでリキシャを購入し、それに乗って Bangladesh をひと回りをした。それからリキシャを日本に運び、2010年3月11日からはいよいよ日本縦断の旅をスタートさせた。

4ヶ月ものあいだ、僕はリキシャに乗って日本中のさまざまな場所を訪れた。大分の峠道を越え、沖縄のサトウキビ畑を抜け、瀬戸内の島々を巡った。そこで目にしたのは日本という国の多様性だった。たとえば鹿児島県の高野漁師さんと出会ったときには、相手の話す言葉の三割も理解できないことに驚いた。漁師さんの口から出る「ネイティブの薩摩弁」は、お国訛りのレベルを遙かに超えてほとんど別の言語だったのだ。それでも彼が語ってくれた話(もちろんかなりの部分は自分の想像力で補わなければいけなかったのだが)には心惹かれるものがあった。水質の悪化と温暖化の進行で長く途絶えていた「出水浅草海苔」という品種を、苦勞の末に復活させたこと。できた海苔をはじめて口に入れたときの甘さ。奥さんと二人流した涙。その言葉には確かな重みがあった。その手には何十年も自然を相手にしてきた人独特の厚みがあった。

この旅で僕はたくさんの「はたらきもの」に出会った。沖縄の染織家、奄美大島の製糖職人、佐賀の畜産家、静岡のお茶農家。数々の苦勞を乗り越え、自分の仕事に誇りを持ちながら働く人々。その姿を見ていると、日本という国もまだまだ捨てたもんじゃないと思えてくるのだった。



MESSENGER メッセンジャー

最近では、すっかり都市の見慣れた光景となったメッセンジャー。自転車と自分の身体を使い、荷物を確実に、かつ迅速に届けるその仕事には、どんな魅力があるのだろうか。会場に展示されたポートレート撮影のために集まった31人のメッセンジャーにアンケートを実施。それぞれ回答のなかから、いくつかの言葉を抜粋した。

メッセンジャーになったキッカケは？

ノ、いや神からの推奨／雑誌で見て／街で見かけて／友人・知人の誘い／自転車が好きで／身体を使う仕事がしたくて、フロム A にたまたま載っていたから／体がうすくので／お金がいと聞いて／中学生のときに海外のメッセンジャーの写真集を見てカッコよさに惚れた。手元に MTB があってバイク便は嫌だったのでメッセンジャーになろうと思い始めた／太陽の下で仕事をしたかった／好奇心／ロンドンでメッセンジャーたちと触れ合って／当時 MTB クロスカントリーの選手だったので、走りながら稼げればというシンプルな理由

メッセンジャーになる前にしていた仕事は？

学生／デザイナー／露天商／ゲーセンの店員／建築現場作業員、プール監視員、ダスキン／美術制作、コロッケ屋／自転車に乗らないメッセンジャー／CM 制作／内装屋／スターバックスコーヒー／バンドマン／ヨドバシカメラの販売員／ケンタッキーフライドチキン／バイク便／酒屋と俳優／オペレーター／お店でよくバイトしてた／舞台大道員／焼き肉屋のポーター

仕事用の自転車へのこだわりは？

軽さと可能な限り自分でメンテしなくてすむこと。メンテは他人にしてもらう／壊れてもすぐに直せるように汎用部品を使うこと／頑丈／手作り／安くてもボロボロなこと／毎日のことなので、軽くて身体に負担のないようにする／雨でもとまるやつ／自分のポジションを出すことが大事／カッコよくて速いもの。一目で自分のものと分かる個性／チェーン、ギア以外は掃除しない。鍵をしないので汚いと遊まれにくい／めずらしいフレーム(規格が変)をわざわざ使う／古くさと新しさが同居したデザイン自転車／ほとんどがもらい物／ペダルが回ればいけるじゃない／道具として最高のものを作りました

仕事をする上でのこだわりは？

流暢なしゃべり。自分流の体臭／確実さと速さ／誰よりも速く届ける。(お客様の) 気持ちと幸せを共に／安全第一。流れが大事／動きにムダをなくす／常に心にゆとりを持つ事。冷静でいられるように心がける／世界の空気を読むように心がける。手をキレイにする／周囲に迷惑をかけない／ファーストスタイルジェントルマツ。最高のサービスを提供する／一般の車との共存。さわやかな接客！／全力で楽しみ、全力でペダルを踏む／笑顔／(至りませんが)お客様のことを一番に考えてあげること／食事中は急いで食べる／遅刻しない

メッセンジャーになって意識が変わった事は？(自分、経済、社会、国、時代などに対して)

どの業界が元気が何となくわる。景気対策をお願いします／教科書に乗っていることは一つの情報として捉え、何事も実際に自分が見た事を大切にしようになった／プロということに対しての考え／生きるって全部自己責任／接客に対する楽しみ方／危険とはいつも隣合わせだということ／時間を守る／社会との関わり方。みんなつながってるなと思った／自分の体調について／自分が何をやりたいのか考えるようになった／未来に対する不安より現在の幸せをかみしめる大事さ気付きました／お金の大切さとお金がなくてもどうにかやってしまうことに気付いた／年々髪が少なくなってきたので最近1万円するシャンプーを買いました

メッセンジャーをやる上で世界と日本との違いは？

都市によって文化が違うという部分は難しいと思うけど、メッセンジャー業務に違いはないと思う／自転車に対する社会の理解／メッセンジャーというより、世の中の自転車に対する認識の差を感じる。欧米は自転車に対して寛容である。アジアは逆／都内は走りづらい道が多すぎる／東京がめちゃくちゃでかい。街の顔が場所によって全然違う／外人として日本でやるのは、自分の国でやるのと違うことがあれば、日本の警察はやさしいかな／言葉くらいではないでしょうか？／違いはないと思う。仕事に対する個々のモチベーションは日本も世界も一緒だと思う

メッセンジャーをやり続けている理由は？

常にフレッシュな時間を送れるから／好きだから／いろいろな人と出会えるから／レースと似てるどころ(速いことが喜ばれるなどなど)／対自分の会社、対お客様)／ビールが美味しいから／女性でもできるということの証明／メッセンジャー特有のコミュニティはおもしろい／立てた旗を支えるため、あとは余計な人間と関わりたいくないから。速に出会うべき人に出会えるから／自転車に乗りながら、いまの東京を肌で感じられる／自分の心身のバランスを保つため。もちろん家族のため／仕事・仲間が最高だから／天職だから／誰かその理由に教えてくれませんか？

メッセンジャーになったきっかけはさまざまでも、身体を使うこと、都市の空気や季節を感じることに、メッセンジャー仲間の国境を越えたつながり、届けることでの出会い、などがモチベーションとしてあるようだ。それにより、自分に、社会により向き合い、考えを深めている人も少なくない。けれど、何よりも「好き」や「楽しい」が溢れるメッセンジャーという仕事はやはり魅力的だ。



©Miyuki Pai Hirai

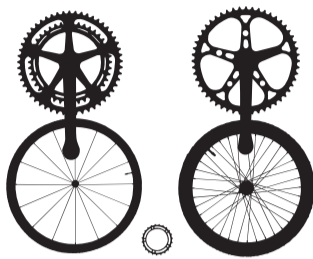


+81(0)3-6804-3799
www.alexanderleechang.com



PACIFIC PEDAL LIFE DESIGN

EVENT INFORMATION



PEDAL MARKET @UNU 2010.8.8 sun. 10:00-16:00

8.8一日限りの自転車フリマ「PEDAL MARKET」が東京都心の青山・国連大学前に出現！

毎週末土日に青山・国連大学前で、東京近郊のこだわり農家さんや八百屋さんを集め、心も頭も固くなった都市住民に土の香りと匂の恵みを届ける「Farmer's Market @ UNU (ファーマーズマーケット@国連大学前)」で、一日限定の自転車フリマを開催！ガレージに眠ったお宝や、新しい主人を待つ中古パーツなど、自転車グッズを大放し。おいしい野菜と自転車グッズ、一粒で二度おいしい、一度と言わずに二度三度！増えすぎたパーツを整理したい上級者や、自転車に乗り始めたばかりのカスタム初心者も、8/8は青山国連大学前に大集合だっ！

日時：8月8日(日) 10:00 - 16:00 会場：青山・国際連合大学 住所：東京都渋谷区神宮前5-53-70 国際連合大学前

Farmer's Market @UNU

<http://www.farmersmarkets.jp/>



PEDAL DAY @YOYOGI PARK 2010.8.18 wed. 13:00-23:00

暑い日には自転車に乗ろう！
自転車乗りによる自転車乗りのための野外フェス
「PEDAL DAY」8.18代々木公園イベント広場で開催！！

暑い夏には汗をかく、自転車に乗っても汗をかく、ならば徹底的に自転車で汗を楽しもうよ！野外フェスは音楽のためだけにあるんじゃない！！自転車にも祭りを！昼間の炎天下にはプロのトライアル妙技と珍自転車にうなり、アスファルトの熱気も冷めた暮れ時にはバイシクルミュージック&ムービーに浸り、寝苦しい東京の熱帯夜を自転車で突っ走って夕涼み。ねっ、自転車って最高じゃないですか？夏フェスは山の中で起きているんじゃない！東京のど真ん中でも起きてるんだ！！

日時：8月18日(水) 13:00 - 23:00 会場：代々木公園ステージ、ステージ前、広場 住所：東京都渋谷区神南2 代々木公園B地区

RIDE TO TOKYO 地方から自転車で上京した強者が代々木公園に集まる!集まれ!!
トライアルエキシビジョン プロライダー宮岡啓太氏による超絶技巧パフォーマンス。トライアルの体験会も開催!
BIKE MUSIC 野外ステージでBIKE MUSICの生バンドライブ&自転車を愛するDJ達によるゴキゲンなサイクルチューンでドロップ!
BIKE FILMS 世界中の自転車カルチャーを伝えるレアなムービーを星空の下で大上映! 自転車に乗りながら見れる!
NIGHT BIKE SHOPS 東京の最先端の自転車カルチャーを発信する厳選自転車ショップがお店を飛び出し代々木に出張!
珍車体験 なにこれ?自転車?! 今まで見た事も無いレア自転車に乗れる!
パニーホップコンテスト 誰が一番高く跳べるのか? 自転車で! トリック野郎あつまれ! パニーホップのコンテストを開催!
PEDAL DAY NIGHT CRUISING 夜は空いてる東京の道、みんなで走れば楽しいよ。夜景を楽しみながらグループライド!
PEDAL FOOD Farmer's Market @ UNU で大好評のキッチンカーが登場。エナジーフードでお腹を満たせ!

※コンテンツ等は予告無く変更の可能性があります。最新情報はウェブサイト(<http://www.pedalife.com/>)にてご確認ください。

LECTURE INFORMATION

自由大学特別講座

「自転車学—Pedal Lifeの未来像」

自転車はこれからの社会ではとても大切な働きが期待されています。都市の文明が発達しているところこそ若者は自転車に乗って行く傾向が見られます。未来の社会での自転車の役割は、いままでとは違うものになっていくでしょう。自転車産業の未来像、移動手段の移行について自転車の可能性を探っていきます。

受講料:全5回 28,000円 ※第0回も含まれます。(単発聴講各回 5,000円、第0回 3,000円) 会場:東京ミッドタウン・デザインハブ[ミッドタウンタワー5階]

*自由大学とは現代の大学で求められるのは、新しい価値観を持って講義を企画し、「自ら求めて学ぶ」人が自由に学べること。教えない、伝えたいという情熱を持つ人が自由にテーマを出し、講義をすること。自由大学では現代の「clever」だけど「wise」でない若者から、時代の変化に流されない知性を身につけた大人まで、実際に役に立つ教習を追求しています。教える人、学ぶ人、講義をキュレーションする人、企画運営する人が一体となって前進していく、それが自由大学です。

【講義計画】

- 第0回 8月6日(金) 18:00 - 20:30 「PACIFIC PEDAL LIFE DESIGN 展」ボードメンバーによるオープニングレクチャー キュレーター：黒崎輝男(流石創造集団株式会社)
- 第1回 8月7日(土) 16:30 - 18:30 「バイシクルカルチャーと都市デザイン」講師：杉浦邦俊(NPO法人バイシクルエコロジージャパン)
- 第2回 8月15日(日) 14:00 - 16:00 「未来の自転車社会」講師：三輪ノブヨシ(立体アーティスト/サンリン自転車生活社)、大谷和利(テクノロジーライター)
- 第3回 8月21日(土) 14:00 - 16:00 「世界の働く自転車事情」講師：佐藤洋一(早稲田大学社会科学総合学院教授)、陸山 眞澄(働く自転車研究会)、GOGO(メッセンジャー)
- 第4回 8月21日(土) 16:30 - 18:30 「日本の自転車史とデザイン」講師：荒井正(SILK CYCLE)
- 第5回 8月22日(日) 14:00 - 16:00 「地球環境と自転車」講師：マイケル・ライス(自転車選手/俳優)

受講の申し込み、講師プロフィールや最新情報は以下の、自由大学の公式サイトでご覧いただけます。

自由大学 <http://www.freedom-univ.com/>

東京ミッドタウン・デザインハブ 第23回企画展

PACIFIC PEDAL LIFE DESIGN

アジア-パシフィックの自転車生活デザイン展

アジアの都市生活の未来は、
自転車とともに、
快適に楽しく生活することにある。

クリーンでエコロジカルな移動手段として、ファッションやカルチャーとして、
またインダストリーとして、いま改めて注目されるのが自転車です。
急速な経済成長をとげつつあるアジア諸国、
とりわけ中国では、3.2人に1台、じつに4億台以上の自転車が、
移動、運搬、販売など、生活のさまざまなシーンで重要な役割を果たしています。
一方、クルマ社会が成熟した欧米では、メッセンジャーなどの仕事をはじめ、
マウンテンバイクやBMX、知的に自転車を楽しむ生活など、
新しいカルチャーが次々と発信されています。
本展ではこうした自転車を、「働く」「考える」「食べる」「走る」「遊ぶ」の
5つの動詞から考え、実車と映像を交えて紹介します。

www.pedallife.com

2010.7.29 thu. - 8.27 fri. 11:00-19:00
TOKYO MIDTOWN DESIGNHUB
Midtown Tower 5F Admission Free

東京ミッドタウン・デザインハブ [ミッドタウン・タワー5階] 無休・入場無料

主催: 東京ミッドタウン・デザインハブ
企画: 財団法人日本産業デザイン振興会、ペダルライフデザイン展実行委員会
〒107-6205 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー5F
Tel: 03-6743-3776 Fax: 03-6743-3775
URL: <http://www.designhub.jp> E-mail: info@designhub.jp

Tokyo Midtown

DESIGN
HUB



RIDE AND WORK



RIDE AND THINK



RIDE AND EAT



RIDE AND DASH



RIDE AND FUN